知る、遊ぶ、和の心を楽しむ旅の月刊誌

ひとときhitotoki

2
2014

定価390円税込

特集 海と陸、日本と海外が出会うドラマチックな街

海峡劇場、下関

出演 坂本龍馬、藤原義江、ポッタリさん、アルフレッド・コルトー……

十津川——聖地に囲まれた村

飴色の食べる宝石、東出雲のほし柿

【新連載】中世不思議ばなし 西山克

東海道・山陽新幹線時刻表付

この熱き人々——30

南博男

スタントマン

一度は断念したスタントマンへの夢を追ってアメリカへ。
厳しい現実を生き抜く戦いで心身を鍛え上げ、
ついに憧れ続けた世界へとたどり着いた。
ハリウッドが認めたその高度なスタントワークで、
アクションの美学を追求する寡黙な挑戦は続く。

吉永みち子・文
赤城耕一・写真
text by Michiko Yoshinaga photographs by Koichi Akagi

スタントマンの頂点へ

短く刈った髪、薄手のTシャツの肩を盛り上げている筋肉、アスリートを思わせる贅肉のない引き締まった身体。精悍な顔に戸惑い気味の表情が広がる。

「取材とか初めてなんで、何か緊張しちゃって……」

ロサンゼルスに住み、ハリウッド映画に出演している南博男。四三歳。でも、その名前を知っている人はほとんどいない。アクション映画の観客が最も手に汗を握る派手なアクションシーンで、危険を伴う撮影を俳優の代わりに演じるスタントマンである。

命懸けの仕事をしていても、決して表舞台に立つことはない。俳優のスタントダブル*を務めても、エンドロールにその俳優と並んで名前が出ることはない。あくまで影として危険と向かい合ってきた南博男の名前が世に知られたのは、二〇一〇年春。「トーラス・ワールド・スタント・アワード」という、ハリウッドで毎年開催されるスタントマンやアクション部分のコーディネーターなどに授与される、アクション界のアカデミー賞といわれる国際映画賞で、日本人初のベスト・ハイワーク部門の最優秀賞を受賞したのである。

高所からのジャンプやダイブに関するスタントが対象のベスト・ハイワーク部門と、体当たりで演じるハーデスト・ヒット部門の両方にノミネートされ、ベスト・ハイワーク部門での受賞となった作品は「PUSH 光と闇の能力者」というSF映画。超能力者の念力で飛ばされ、二センチの厚さのガラスを突き破り八メートル下の車に落下するというスタントでの受賞だった。

八メートルといえば建物の三階から落下する感じだろうか。車の窓ガラスで五、六ミリというから、その三倍以上の分厚さのガラスをどうやって突き破ったのか。

「落下のシーンは七テイクやったんです。落ちた瞬間、車のトランクが開いて人が飛び出すはずなのに、そのタイミングが合わない。ワイヤーをつけているとはいえ、三テイク目ぐらいからいったいどうなるんだろうと思いました。ガラスは火薬を仕掛けてヒビを入れて、その瞬間にヒビに突っ込むんですが、頭を切って病院で縫いました」

痛そう……怖そう……ひとつ間違えば大変な事故につながる。

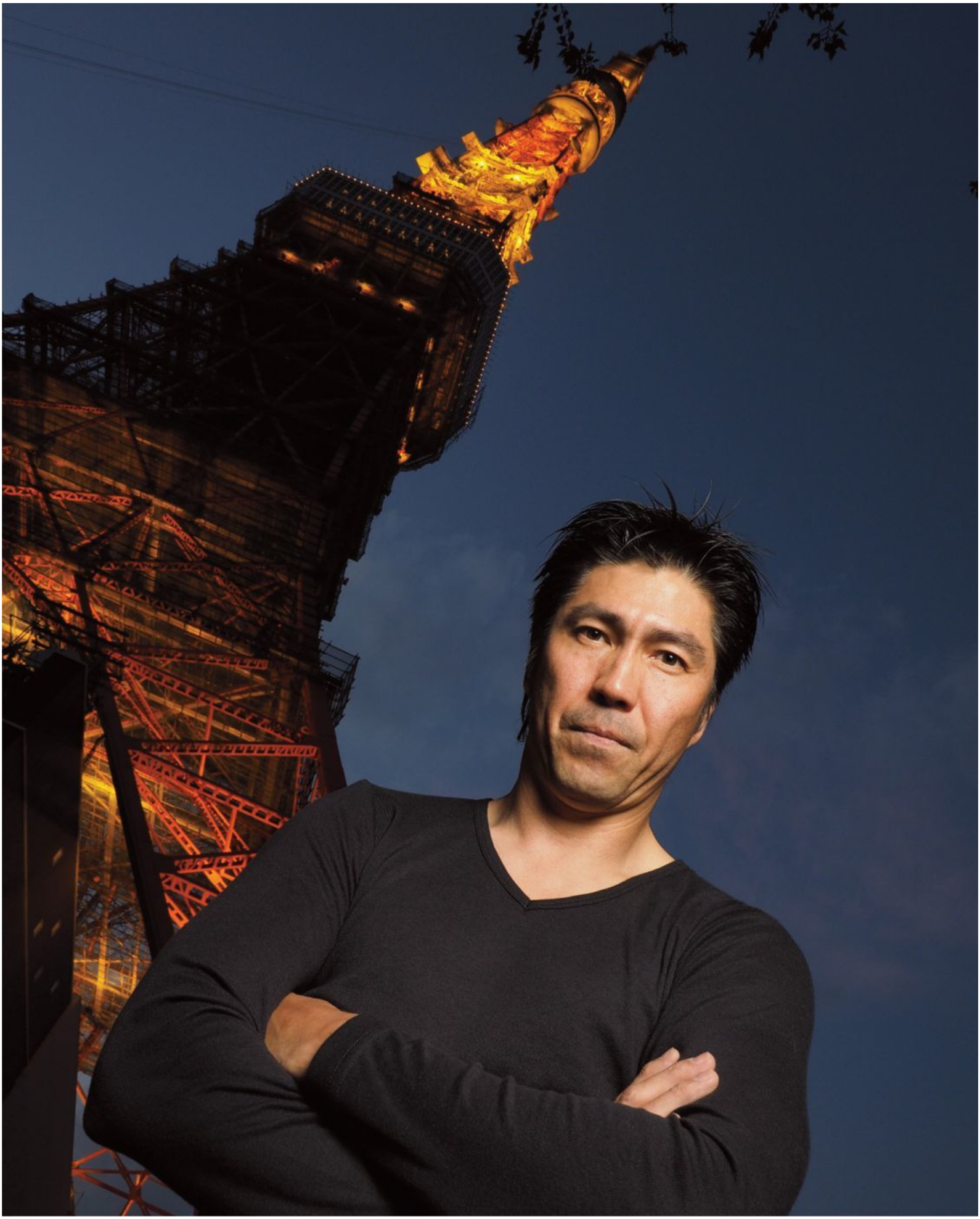
「正直、怖いし、痛いに決まってます。怪我をする人も亡くなる人もいますが、できなくなれば、次の誰かを呼べ！　という世界。それがスタントマンの仕事ですから」

ビジネス環境としては日本よりも厳しいアメリカに踏み留まり、日本よ

Hitotoki Interview Hiroo Minami

【みなみ ひろお】
1970年、京都府生まれ。日本正武館、JAC京都養成所などを経て96年、スタントマンをめざし渡米。得意の空手を生かし人気テレビシリーズ「パワーレンジャー」などで活躍、映画へと活動の場を広げる。2010年、「トーラス・ワールド・スタント・アワード」で日本人初のベスト・ハイワーク部門最優秀賞を受賞。13年公開の映画「ウルヴァリン SAMURAI」「47RONIN」では真田広之のスタントダブルを務めた。

*演技の中で危険度の高いアクション部分を役者と同じ演技内容・動きで代演する



りはるかに派手なアクションを求められるハリウッドでの受賞は、南のこれまでの苦労が報われた瞬間でもあったのだろう。

「スタントマンにとってものすごく名誉なことで、一〇〇〇人ぐらいギャラリーがいる舞台で名前を呼ばれた時は本当にうれしかった。家族もみんな連れて行ったんです。喜んでくれました。この受賞のおかげでグリーンカード(永住権)を取得することができて、ビザの更新で苦労することがなくなりました」

アメリカに渡った時に一歳だった上の娘は、今年一九歳。危険を引き受けることを仕事にしている夫や父をもつ家族にとっても、生命の危険への不安に加えて異国での生活の不安定とも闘ってきた年月だったわけで、本人とはまた別の感慨があっただろう。

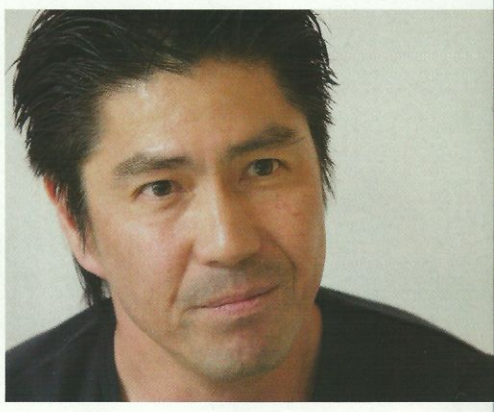
アクションへのあこがれ

それにしても、南はなぜかくも痛くて怖いスタントマンの道を歩くことになったのか。なぜアメリカというより厳しい環境を選んだのか。

「一九八一年、小学校六年生、一一歳の時にあこがれたんです」

間髪を入れずに明確な答えが返ってきた。南の生まれは京都。映画館で真田広之主演の「吼えろ鉄拳」という映画を一一歳の時に観たという。

「真田さんのアクションにすごくあこがれて、自分もああいうのをやりたいと思ったんです。真田さんの所属していたJAC(ジャパンアクションクラブ)に入りたいと思ったけど、当時東京にしかなくて、中卒からしか入れなかった。父にアクションやりたいんだと相談したら、それなら空手をやっといたらどうだと空手道場に連れて行かれました」



沖縄直伝剛柔流空手道「日本正武館」に入門した南は、試合に出る度に好成績を残し、メキメキと頭角を現した。大会での優勝記録は一四回、準優勝四回、三位四回という大活躍。一三歳の時には、JACの養成所が京都にできて中学生も入れるようになったと知り、さっそく通うことにした。研修期間は一年。もちろん最年少。

その頃、JACは俳優養成所という性格ももつようになっていた。スタントではなく表舞台の俳優を目指そうという気はなかったのだろうか。

「ジャズダンスや歌や芝居のレッスンもあったんですが、どうも好きじゃない。やってられへんって感じでいつも一番後ろ。アクションは週に一回で、自分はそこしか楽しめないということがわかった。で、一年後に研修が終わって、続けるとしたら東京に出るしかない。まだ中学生だったし、京都から出るのは物理的にも無理と諦めました」

京都で高校に進み、指導員として道場で小学生に教えながら空手一筋の武道家を目指したが、高校を出たらそれだけでは食べていけないという現実に直面。一八歳からトラックの運転手を皮切りにいろいろな仕事をし、二三歳で結婚。二四歳で長女が誕生した。

「その時になって、自分はいったい何をやっているんだろう、これでいいのかと思ってしまった。アクションをやりたかったのに、諦めて空手に夢中になり、でも武道家としても中途半端。なぜあの時、東京に行かなかったのか。後悔しても、子どももいるし、もう二四歳にもなって手遅れだし、夢は終わってるんだと思おうとしたんです。でも一方で、子どもが小学校に上がる前なら何とかなるかと考えている自分がいる」

一年後の九六年。妻と一歳の娘を連れて渡米。諦めなければ……でももう一度挑戦したい……というせめぎ合いは、南の中で夢を再び追うと決着したわけだ。

「というか、無理なら無理ではっきり納得したかったのかも。諦め切るために何か行動したかったのかもしれないなあ」

中途半端な自分に引導を渡すためのアメリカは、ハリウッドを視野に入れたロサンゼルス。英語はもちろんできないし、辞書片手にアパートを借りる交渉をし、蓄えを切り崩して語学学校に通いながら、スタント協会の情報を探す毎日。再挑戦するにしても、アメリカではなく日本で夢を追ってもよかったのではないか。

「JACの養成所で一緒だった人や後輩がすでに仕事してるし、その下につきたくないというしょうもない意地とプライドがアメリカに向かわせたんです」

アジア人は目立って重宝されるのではという甘い考えはすぐに吹き飛んだ。スタントを目指すアジア人は山のようにいる。忍者だって、スタントなら日本人でなくてもいい。一年たち、ビザも切れ、仕事もない。これで諦められると、両親に「帰る」と電話した。

「母はやるだけやってみたんだから帰っておいでと言ってくれたんですが、父は帰ってくるなと言う。帰ってこない覚悟で行ったんじゃないのかって。帰れなくなってしまった。この時が僕の本当のターニングポイントでした」

転がる岩のように

覚悟を決めて行ったのではなく、退路を断たれて覚悟を固めるしかなくなった。いつチャンスが来てもいいように、毎日空手のパフォーマンスや筋トレを続けながら、バイトをして何とか暮らす。そんなある日、日系スーパーで「スタントマン募集」の貼り紙を目に

した。それまでも何度もこの手の情報にトライしてはうまくいかない繰り返しで、何か胡散臭いなと思いながらも、もしやと期待して応募した。

「でも本当に日本人がアメリカで撮影する映画の企画があって。藤岡弘さんも出演する『ショーグン・コップ』という映画でした。事情があってお蔵入りしてしまったけど」

しかし、陽の目を見なかった二八歳での初スタントは、その後の南の人生を転がす第一歩になった。一作撮ったからといって仕事が続くわけではないが、それが縁で人間関係の細い糸は生まれる。「ショーグン・コップ」のプロデューサーから、北野武監督がアメリカで「BROTHER」を撮るから手伝ってくれと頼まれた。仕事というよりボランティア。スタッフの通訳や観光案内だったが、どんなことでも北野監督の映画に携われたのは感激だったという。

一歩が次の一歩の尻尾を手繰り寄せるように、アメリカの人気テレビドラマシリーズ「パワーレンジャー」という戦隊ものを手がける日本人スタントチームと知り合い、ひたすら声がかかるのを待った。スタントのメンバーが紹介してくれた殺陣師の助手などをボランティアでこなすうちに、やっと南にも仕事が回ってきた。レギュラーの仕事ができビザも取得、生活が安定したと思った〇二年、「パワーレンジャー」の制作拠点がニュージーランドに移されることになった。

「仕事をキープするために行くしかない。また家族とともに移住です。ニュージーランドで永住権を取り、そこでハリウッド映画に出たり、ヨーロッパまで出向いたり、『ナルニア国物語 カスピアン王子の角笛』ではスタントのほかにアクションカメラオペレーターを経験し、スティーブン・スピルバーグとトム・ハンクス製作指揮のテレビドラマ『ザ・パシフィック』でも、スタントに加えて日本人スタントメンバーのキャスティングやコーディネートも任されました」

徐々に仕事の幅も広がると、このままニュージーランドにいるのがもどかしくなってくる。ロスに戻りたい気持ちがまたくすぶり出していた。

「生活の安定ならニュージーランドにいるほうがいいんですけど、やっぱりハリウッドに行きたい。O1ビザ*も取れたし、五年ぶりに思い切ってロスに戻ったんです。でも仕事がない。その年は年収八万円でした。ニュージーに出稼ぎに行くしかなくて……。また安定か夢かで揺れちゃって。困っていると知ったかつての仕事仲間が仕事を回してくれたんですが、今度はビザが切れそう。キアヌ・リーブスや真田さんが出る『47RONIN』の撮影に参加するためにロンドンに行ったけど、ビザ申請中で却下されたらアメリカに帰れないかもしれない。そんな状況の時にハイワーク部門の最優秀賞をいただけて、それでグリーンカードにつながったというわけなんです」

痛い思いだけではなく、生活不安やビザ問題や家族の危機に右往左往しながら、一八年間日本に帰らずに道なき道を歩き続けるのは並大抵のことではない。やめたいと思ったことはなかったのかという問いに、南はこう答えた。

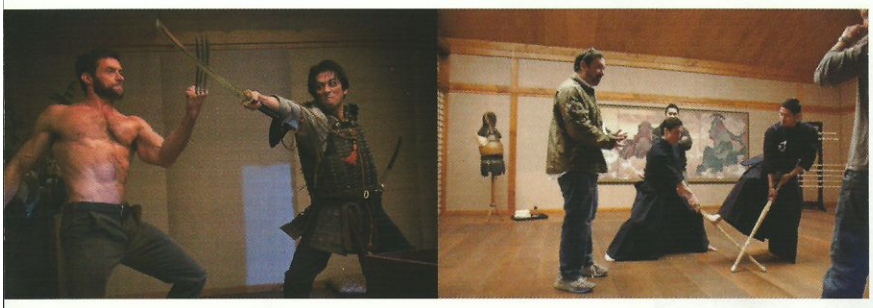
「生き延びてこられたのは自分でも奇跡としか思えない。でも、やめて何をする？　と自分に問いかけてみても何も答えが出なかった。だから前を向くしかなかったんです」

今回の来日は、東京タワーを背景に増上寺でのアクションシーンや新宿、秋葉原、福山市など本格的日本ロケを敢行した、ヒュー・ジャックマン、真田広之出演のハリウッド映画「ウルヴァリン SAMURAI」のDVD発売に向けた、六カ国一六のメディアへのアピールイベント参加のため。スタント代表として20世紀フォックス本社の広報から直接依頼されてのプレゼンで、責任は重い。二月には真田広之のスタントダブルで起用された「47RONIN」が公開された。

南の人生を決めたともいえる真田広之とは、「ウルヴァリン」「47RONIN」で続けてスタントを務めた。南が手帳から二枚の写真を取り出す。一枚には映画「里見八犬伝」の時の真田と一人の少年が写っていた。三〇年前、JACのほかに乗馬センターにも所属していた南が、撮影現場で手伝った時に撮ってもらった一三歳の時の記念写真。もう一枚は、国際俳優とスタントマンとして一緒に映画にかかわった時のツーショット。

「子どもの頃に真田さんにあこがれてこの世界で生きてきたこと、言えませんでした」

表舞台より裏方が好き。だれも知らないけれど実は自分がやっているという自己満足がカッコイイと思う。そう言うと、文字通り生きるか死ぬかの修羅場を耐えてきた男は、思い切り不似合いな、はにかんだ笑顔を浮かべた。



左／「ウルヴァリン SAMURAI」では真田広之（右）のスタントダブルを務めた
右／撮影前に監督と殺陣を確認（中央が本人）
(C)2014 Twentieth Century Fox Entertainment LLC.All Rights Reserved.

【よしながみちこ】
1950年、埼玉県生まれ。85年、『気がつけば騎手の女房』で大宅壮一ノンフィクション大賞を受賞。著書に『母と娘の40年戦争』（集英社文庫）、『怖いもの知らずの女たち』（山と渓谷社）などがある。

＊科学、芸術、教育、ビジネス、スポーツの分野で卓越した能力を有する者に発給される米国のビザ